ピンバッジが繋ぐ28年の軌跡

2026/2/6　玉井政道

　始まりは 1998 年、白銀の長野だった。当時、会場の至る所で目にした光景は、今も私の脳裏に焼き付いている。世界中から集まったプレス関係者が、血眼になって一匹の「青い猫」を探していた。テレビ朝日が配ったドラえもんのピンバッジ。それが日本のアニメキャラクターが、オリンピックという国際舞台で「世界共通の言語」となった歴史的瞬間だった。

その熱狂を間近で見た私は、小さなピンバッジに宿る無限の魅力に取り憑かれた。それ以来、4 年に一度、私は日本が世界に誇る文化の証人として、TV メディアが制作する非売品ピンを追い続けている。

時代の移り変わりと共に、主役たちは交代していった。テレビ東京のピカチュウは、もはやピン・トレーディング会場における「最強な交換ピン」として君臨し、どんなレア物とも引き換えられる絶対的な価値を持つようになった。コレクターたちは、その黄色い姿を求めて国境を越え、言葉の壁を越えて語り合う。ピンバッジは、単なる放送局の記念品ではなく、友情と情熱を証明する「鍵」へと進化したのだ。

記憶に新しい前回のパリオリンピック。そこではフジテレビのルフィが、まるで新時代の覇者のように爆発的な人気を博した。そして今、2026 年ミラノ・コルティナ。私の目の前には、最新の「エルバフ編」を彷彿とさせる角兜を被ったルフィがいる。イタリアの雪山を背景に、冬の装いに身を包んだキャラクターたちのピンバッジが、再び世界中のコレクターを争奪戦へと駆り立てている。

eBay の画面越しに感じる、地球の裏側からの熱気。TV メディアの小さなピンバッジが、数万円という価値で取引されるその理由は、単なる希少性だけではない。そこには、4 年に一度の祭典に懸ける放送局の誇りと、日本のアニメが世界に与えた感動、そして何より、長野から今日まで変わらぬ情熱を持ち続ける私のようなコレクターの物語が刻まれているからだ。

長野からミラノへ。手元にあるピンバッジを眺めながら、私は次の 4 年後、そしてその先の未来に思いを馳せる。私のこの物語は、オリンピックの聖火が灯り続ける限り、決して終わることはない。